

津軽地域のハシボソ・ハシブトガラス 冬季は放置果実餌に

ハシボソガラスとハシブトガラスの餌資源(研究グループ提供)



弘前大学農学生命科学部のムラノ千恵助教(48)らの研究グループは、農作物・生活環境被害を引き起こすとされるハシボソガラスとハシブトガラスについて、これまで解明されていなかった津軽地域における通年での餌資源を解明した。「ガラス」として「くくり」にされがちな両種だが、雪が

ない時期にはそれぞれ異なる環境の餌を利用する一方、餌に限られる冬季はリンゴをはじめ放置果実などの人為的資源を共に利用していることが分かり、これらの適切な管理が地域内の個体数抑制につながる可能性が示唆された。

(西尾 瑛)

弘大・ムラノ助教ら研究グループ 資源解明 適切管理で個体数抑制も

研究は弘前大のムラノ助教、東信行教授、岩手大学大学院連合農学研究科博士課程4年(弘前大配属)の熊倉優太さんが行い、5月29日付の国際誌「Ecological Research」に掲載された。



熊倉 優太さん



ムラノ千恵助教

観察で餌資源などを調査。その結果、春から秋は、ハシボソガラスは主に水田などの農耕地で落穂や昆虫などを食べ、ハシブトガラスは畜産施設の飼料や山林の自然果実を利用するなど、両種は異なる資源利用戦略を持っていて、一方、積雪期には共にリンゴやカキといった放置果実などの人為的資源を集中的に利用することが分かった。

期間を通じて家庭ごみの利用は確認されず、地域で実施されている防鳥対策が一定の効果を発揮し、非繁殖個体が市街地よりも郊外環境の資源に依存している可能性も示された。

熊倉さんは「雪が降る津軽でガラスが何を食べているか不明だったが、2種とも家庭ごみではなく産業ごみなどを食べていることが分かり、この部分を減らすことでガラス被害を減らせる可能性がある」とし、ムラノ助教も「地域でのガラスの増減は、縄張りを持ち一定程度数が固定される繁殖個体ではなく、移動性が

この画像は、当該ページに限って”陸奥新報”の記事利用を許諾したものです。
転載ならびにページへのリンクは固くお断りします。